ほっかいどう学新聞
第2号
2020 夏秋号

早（はや）っ！ 広域観光のための道路が戦前にできたのは、なぜ？

一万人あたりの自家用車保有数がわずか4～8台だった昭和初期の北海道で、広域観光構想に基づく道路を完成させた男が、阿寒横断道路建設の功労者、永山在兼（ながやまありかね）だ。今年は、国民の祝日「山の日」と「道の日」が重なる。山の景観を結び国立公園指定に貢献した道の物語を辿った。

昭和初期の阿寒横断道路。
撮影者の故 松葉末吉氏はこの写真に「丸太棒の上を渡る幌型フォード車」とメモしていた

「道の日」と「山の日」が重なる奇跡の年

今年8月10日は、国民の祝日「山の日」と「道の日」が重なった。「道の日」は、大正9年（1920年）8月10日に日本で最初の道路整備についての長期計画である第一次道路改良計画が実施されたことによる。日常生活や経済活動に欠くことのできない道路だが、あまりにも身近すぎてその役割や重要性が見過ごされがち。そこで、道路の意義・重要性についての関心を高めようという趣旨だ。8月は「道路ふれあい月間」にもなっている。

一方、山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する「山の日」は、本来8月11日。しかし今年は東京五輪・パラリンピック特措法により10日に移動した。2つの記念日が重なるのは歴史上、今年だけかも（!?）

そんな今年だからこそ、ひも解きたいのが阿寒横断道路をめぐる物語なのである。

前置きが長くなってしまったが、上の写真をご覧いただきたい。険しい山中の道を幌型フォード車が行く。バンパーには、障害物を取り除くためか、

崩れそうな路肩、道幅は1台通るのがやっとという昭和初期の阿寒横断道路。撮影者は故 松葉末吉氏

スコップが縛り付けられている。撮影者は、『アサヒグラフ』などの写真専門誌で高い評価を受けていたアマチュアカメラマンの松葉末吉さんだ。本業は弟子屈町川湯のバス運転手で、90歳で他界するまで写真に向き合った。この写真を発掘したのは、釧路湿原・阿寒・摩周シーニックバイウェイルート運営者会議の皆さんだ。これらの写真を集めて開かれた「懐かしシーニックパネル展」（平成18年、弟子屈町）は、ノスタルジックな想いに浸ることができる上、地元の社会資本整備の歴史をリアルに感じられるとあって、熱い注目を集めた。

3年で完成した“477曲がり”の道

昭和初期の北海道の自家用車所有は二万人あたり4～8台。自家用車は富裕階級の贅沢品でその多くは輸入車だった[※1]。そんななかで、将来、人々が思い思いに自動車を乗り回して観光地を周遊する時代が来るなど、考えられるものだろうか。だが、そう予測した男がいた。それが永山在兼なのだ。

永山在兼は、明治22年（1889年）鹿児島県生まれ。東京帝国大学で土木工学を学び北海道庁技術師高等官となって、大正7年に釧路土木派出所長に就任した。大正10年、道議会では、既に天然記念物に指定されていたマリモを擁する阿寒湖のみならず、屈斜路湖、摩周湖を含む大公園にしようという建議が採決された。必要なのは一帯をつなぐ道路だと永山は考えた。永山は地域の観光団体「釧路保勝会」の発足にも携わった。ハードを整備するだけではなく、ソフトの重要性も認識していたのだ。いやはや、なんという先見の明！

気骨ある顔立ちの永山在兼。『北海道を支えたインフラ事業の150年』より

阿寒横断道路の建設にあたっては永山自ら予算折衝を行い、道庁の反対論を押し切って予算を獲得。昭和3年（1928年）、着工した。重機のない当時、工事はダイナマイトと、人力のツルハシ、スコップだけが頼り。にもかかわらず、わずか3年で約40kmの道を通し、昭和5年（1930年）に完成した。道路の幅は約3.6m。477曲がり道路と呼ばれた、カーブだらけの道だった。地元の歴史研究家たちは、この危険で困難な工事を短期間で成し遂げるには相当の無理があったのではないか、タコ労働はなかったのかなどの視点からの検証も行っていきたいそうだ。

昭和6年（1931年）国立公園法が制定されると、国立公園調査員の一行が現地視察に来た。火山がつくった雄大な山と湖が国立公園候補になったのだ。永山もさぞ得意だったことだろう。しかしこの時、永山の姿はなかった。阿寒横断道路は難工事ゆえ、予算十三万円に対し二十数万円も費やしてしまい、永山はその責で転勤させられていたのだ。功績が必ずしも功績として認められるとは限らない、人の世の不条理である。

（※1）奥井正俊（1988）：大正・昭和初期における自動車の普及過程.新地理36－31

制作協力／釧路湿原・阿寒・摩周シーニックバイウェイ

現在の阿寒横断道路

「永山峠」と呼ばれた双岳台からは雌阿寒岳、雄阿寒岳が一望できる

しかし、地元の人々はそうではなかった。道路を「永山道路」、ルート中の最高地点である標高750mの峠を「永山峠」と呼び、永山の恩を歴史に刻んだのだ。さらに、弟子屈町は、永山の故郷・鹿児島県日置市との間で姉妹都市交流を続けている。

名勝旧跡から大自然の大風景へ

話を国立公園調査に戻そう。調査員一行は、釧路駅から川湯駅までを、前年に弟子屈～川湯（現・摩周～川湯温泉）駅間が開通したばかりの釧網本線でやって来た。そして、永山が完成させた阿寒横断道路で、弟子屈から阿寒湖畔を巡ることができた。現地にアプローチできる交通インフラの整備が、とりわけ重要だった。

メンバーの中心は田村剛博士だ。東京帝国大学農科大学林学科を卒業後、内務省嘱託となり、大正12年（1923年）には世界初の国立公園である米国のイエロー・ストーン国立公園を訪問した。〝国立公園の父〟と称される初代国立公園局長のスティーブン・メイサーと対談した後、北米とヨーロッパ各国を一年かけて回った。その結果、田村は、従来の日本三景や名勝旧跡を愛でる風景観から脱皮し、スケールの大きい自然を鑑賞する大風景観を日本に持ち込んだのだった。スティーブン・メイサーに対し、田村が〝日本の国立公園の父〟と称されるのは、そのためだ。ちなみにこの視察にかかった経費として1万円（現在の貨幣価値で約1000万円以上）の大金を自分で工面して海を渡ったというから、「公」への使命感には頭が下がる。

ちなみに今年は、イエロー・ストーン国立公園が世界初の国立公園として誕生するきっかけになった1870年から150年の節目ということで、日本郵便から「国立公園理念150年」の記念切手が発売されている。イエロー・ストーンを発見者のものにするのではなく、全国民が享受できるようにと探検隊が提案したのが1870年であった。

さて、現地で一行の説明にあたったのは、釧路営林区長の近藤直人だった。北海道帝国大学で林学を学んだ近藤は地質や植生を知り尽くしており、絶妙のガイドぶりだった。委員たちに阿寒湖でウグイ釣り体験をさせたり、血圧改善効果があるというシャクナゲで作った杖をプレゼントしたり。誘致のためのおもてなしは、時代を先取りしていた。近藤は、後にさっぽろ雪まつりの創設にもかかわる。永山、田村、近藤を3恩人として弟子屈町は今も語り継いでいる。

だがそもそも阿寒湖周辺の森が伐採されてしまっていたら国立公園への気運は起きなかっただろう。そこには前田一歩園（いっぽえん）の存在がある。明治時代の官僚で殖産興業を進めた前田正名（まさな）が明治39年（1906年）に阿寒湖畔の森林約5,000haの貸し付け・払下げを受けたことに始まり、乱開発の波から森を守っていたのだった。現在も、一般財団法人前田一歩園財団が自然保護・活用にあたっている。

永山が結んだ阿寒地域と摩周（川湯）地域にまたがる山岳と湖は、昭和9年（1934年）12月、阿寒国立公園に指定された。それは北海道の国立公園の中で最も早い。この時に指定されたことには大きな意味があった。やがて時代が戦争へと突入していくなかで、軍用材として大量の木材が伐採されたからだ。日本一の規模とされたオンネトーのアカエゾマツの純林も国立公園の区域外は伐採されてしまったが、国立公園内は最小限の被害にとどめることができたという。

阿寒国立公園は平成29年（2017年）に、神の子池及び摩周カルデラ外輪山山麓が公園区域として拡張され、「阿寒摩周国立公園」となった。国立公園の名称に広域性が反映され、名実ともに永山の信念が実ったともいえる。

観光は平和が保たれて初めて成立する産業だ。世界中に感染拡大したコロナ禍は、それを私たちに突きつけた。地域を活性化する交流人口拡大のカギにして平和産業である観光。それを支えるハードとソフトはどうあるべきなのか。withコロナの今、新しい価値観と方法論の構築が、私たち一人一人に求められている。

文／北室 かず子

ほっかいどう学 指導のツボ

- ☑ 地図帳で阿寒湖や弟子屈町を探させましょう。阿寒湖や弟子屈町の周辺がどんな様子なのか、自分の経験や地図帳から分かることをもとに話し合わせましょう。さらに、インターネットで検索して、実際の様子を確認させたいですね。
- ☑ 阿寒横断道路は、国道241号の一部を指す名前です。国道241号は、どことどこをつなぐ道なのか調べさせましょう。その国道を走る車に乗っている人、運ばれている物を話し合わせると授業が盛り上がります。
- ☑ 阿寒横断道路は、国道241号でも一番険しい地形のところです。昔と今の写真をじっくり見比べて、同じところ、違うところを考え、この道路を作る苦労を考えさせましょう。
- ☑ こんな険しいところに道を付けた永山在兼はどんな人だったのか、またどうして道を付けようとしたのか、ほっかいどう学新聞をもとに教えましょう。そして先人の知恵と汗が今のわたしたちの豊かな生活につながっていることを子どもたちと一緒に学びましょう。

理事長：新保 元康
（元札幌市立小学校校長、専門は社会科）

NOTICE

「ほっかいどう学連続セミナー」予告 イベント調整中です。ご期待ください!

当法人の中核的な活動であるシンポジウムとほっかいどう学連続セミナー(2回予定)を今年度も開催します。新型コロナウイルス感染拡大防止策を講じながら、楽しく中身の濃い場を作ります。教員と社会資本関係のみなさんが、ほぼ半々で集まる、これまでにない学びの機会を創出すべく、調整中です。ぜひお楽しみに。詳しくは、下記をご覧ください。
Facebookは毎日更新中です。

★ほっかいどう学Facebook　https://www.facebook.com/hokkaidogaku/
★ほっかいどう学ホームページ　https://hokkaidogaku.org/

総会報告 令和2年度通常総会終了のご報告

令和2(2020)年8月7日(金)、北海道開発技術センターにて、令和2年度通常総会が開催されました。
今回は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から定款に基づき、書面での表決、または、議長への委任を推奨させていただきました。その結果、以下の全議案について承認いただきました。

【第1号議案】令和元(2019)年度(第1期)事業報告に関する件
【第2号議案】令和元(2019)年度(第1期)収支決算報告及び財務諸表に関する件
【第3号議案】令和元(2019)年度(第1期)監査報告に関する件
【第4号議案】定款の変更(案)に関する件
役員の任期を定めた本法人定款第15条の変更について承認されました。
【第5号議案】令和2(2020)年度(第2期)事業計画(案)に関する件
【第6号議案】令和2(2020)年度(第2期)活動予算書(案)に関する件
【第7号議案】令和2(2020)年度(第2期)理事および監事の選任(案)に関する件
原案(再任14名、新任4名)に加え、直近の人事異動に伴い、令和2年9月1日以降の役員として13名が再任、5名が新たに就任することとなりました。

令和2年度通常総会の様子

設立2年目を迎えるにあたり、本法人への関心・期待の高まりを感じております。
皆様のご期待に沿えるよう一層の活動の充実を図ってまいります。

「ほっかいどう学と共に歩みたい」。応援の声をいただきました。

教育界から
当麻町立当麻小学校教諭
松浦　達也さん

北海道で生まれ育ったわたしを形づくってくれたのは、北海道の自然であり、人であり、社会です。わたしにとっての北海道への恩返しとは、未来を背負う子ども達に教育として還元すること。そこで「雪学習」や「道学習」を通して北海道のすばらしさを伝えています。たとえば雪はマイナス面にばかり目がいきますが、太陽光発電でも雪の反射を利用すれば2倍の電力を起こせますし、雪を蓄えておいて夏場の冷房に活用することもできます。見方次第でマイナスはプラスに転じるのです。また、道路のように当たり前にあるものの背景に先人の努力があり、わたしたちの社会生活において重大な役割を果たしていることも伝えていきたいです。

地域から
NPO法人 日本一直線道まちづくり研究会理事
空知シーニックバイウェイ代表
工藤　克彦さん

NPO法人として道の駅「ハウスヤルビ奈井江」の指定管理を担い、建物の中に古民家を部分再現しました。昔ながらの畳の部屋でくつろぎながら、農業や建設業の若手後継者が地域の物語を語り継いでくれています。生まれた地域を理解することで自分の存在価値が見えてきます。子ども達に何をどう伝えるか、いかに多チャンネルの選択肢を与えられるか、ほっかいどう学から学びたいです。

コロナ禍で北海道の立ち位置がわかりました。大事なのは地域コミュニティをしっかり存続することです。国道12号にある日本一長い直線道路の中間地点という地の利を生かして、高機能の防災拠点としての整備も進めたいと考えています。

ほっかいどう学新聞　第2号　2020年8月31日発行

発行人／新保 元康、編集人／北室 かず子、編集スタッフ／原 文宏　宮川 愛由　森 希美、デザイン／スタジオコロール
発行所／特定非営利活動法人 ほっかいどう学推進フォーラム　〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17
TEL(011)738-3363　FAX(011)738-1889　URL https://hokkaidogaku.org　E-mail info@hokkaidogaku.org